

# 地域から。

第8回

## 大学と共に活性化の道を探る福島県・鮫川村。

text : Reiko Hisashima

福島県の南端、阿武隈高原南部の頂上部にある鮫川村は、典型的な中山間地で、住民の高齢化も進んでいる。しかし、鮫川村には停滞感がない。村の中に新しい施設ができ、景観の整備も進められている。なによりも、そこで暮らすみんなが、元気なのだ。

東京農大短期大学部環境緑地学科准教授の入江彰昭さんは、そのきっかけをつくったひとりかもしれない。入江さんと鮫川村との出会いは偶然だった。10年ほど前、鮫川村による「ふるさと体験バスツアー」に誘われ、学生たちと参加したが、とくに鮫川村に興味があったわけではなかった。しかし、「ごはんもおいしくて、なんととても里山の景観が美しい。現在、村の総務課長で、当時は村営の宿泊施設『ほっとはうす』所長だった鈴木治男さんと知り合い、学生たちともまた来たいということになりました」。再訪、再々訪するうちに、村の景観が荒れていることが気になってきた。緑地学科らしい視点から休耕田を借りて農作業を行ったり、雑木林の管理を手伝ったり……。遊びの要素が大半でしたが、しだいに学生がリーダーにな

り、ほかの学科の先生や学生にも鮫川村との輪が広がっていききました。夏にゼミの集中実習を行った年もあった。また「まめで達者なむらづくり」を旨指し村内でお年寄りの大豆生産を奨励し、その大豆で味噌や醤油、豆腐をつくって村内で販売しようというプロジェクトでは、農大の醸造学科が協力、大豆加工技術を学ぶために



村の職員が研究生として大学に通った。中心部にある山城跡を館山公園として整備する事業には、入江さんたちが村と共に取り組み、村民や学生たちがベンチや道づくりなどを一緒に行った。「農大は昔から実学主義。農学が栄えても、農業が減っては本末転倒ですね。ですから、鮫川村のように農学を

実践できるフィールドで学ぶことができるのは貴重です」

いっぽう村にとっても大学と組むことのメリットは大きい。安定して継続した関係が築けること、専門的なアドバイスをもらえること、若い学生たちが来てくれること、外からの視点で村の魅力を発見してくれること……。

そんな関係をより強固なものにしようとして、昨年、鮫川村と東京農大との間で、農業振興や地域再生に連携して取り組む協定が結ばれた。入江さんら学生たちと鈴木さんからはじまった小さなつながりが、10年を経てこまごまの広がりを見せることになったのだ。

鮫川村では、今年も温泉施設「さざり荘」やパン工房、エコカフェのオープンなどが予定されている。そのスタートアップには、鮫川村でボランティアや実習をした農大の卒業生がいる。

「地元の草花からつくった“花こうぼ”でパンをつくるのは、里山景観保全活動に参加してくれていたOBです。村の農業法人に就職した学生もいます。最近、村外に通っている高校生が、学校の先生に『うちの村、すごくきれいだから見に来てください』と自慢していると聞いたときは、とても嬉しかったですね」

お年寄りも若い人も、自分の暮らす村に誇りを持てる。そのために、大学にできることがある。入江さんたち、そして東京農大の取り組みは、そのことを教えてくれる。

鮫川村 : <http://www.vill.samegawa.fukushima.jp/>  
東京農業大学 : <http://www.nodai.ac.jp/>

### KEY PERSON

FILE. 8

入江彰昭

Teruaki Irie

1971年茨城県日立市生まれ。東京農業大学農学部造園学科卒業。博士(造園学)。専門は造園学、都市農村計画、環境計画、公園計画。都市の環境問題と農山村の環境問題の解決に向けて、ヒートアイランドの緩和に有効な緑地の配置計画の研究、農山村における里山保全と地域再生のフィールド活動に取り組んでいる。2000年より鮫川村里山景観保全活動を学生たちと行い、今年で10年目を迎え、活動回数は67回。高き志をもつ若い学生たちの力は、里山景観の荒廃に悩む地域の再生に大いに役立つ。